

## 国境なき教師団

●カンボジアの  
教育支援に  
関わって③



### 支援を受けて 学校の設備と備品は 整備されているが、 使い方が分からない

金森 正臣 ●愛知教育大学名誉教授  
CIESFカンボジアオフィス副代表



●温度計の目盛りの読み方を  
手作り教材で指導する  
小学校教員養成校の先生  
<撮影>CIESF松倉

カンボジアの学校は、一九七〇年代後半のポルポト時代に、閉鎖され破壊されました。書籍類は、焼き尽くされ、隠し持っていた人は、虐殺の対象になったと言われています。その後、内戦の中で教育が復興されました。一九九九年に私が初めて行った頃は、教科書をはじめとして、学校の設備や備品はほとんどありませんでした。生徒もほとんどノートを持っていないために、板書を書き写すこともできません。板書してあることを唱和して覚えるだけの教育です。当然、宿題もありません。

現在でも、多くの学校は、職員室が不足しており、先生一人につき一つの机はありません。共同の会議室のよ

うな所を、皆で使用しています。ここ数年の間に、電気はかなり普及して、コピー機がある学校が増えました。日本の学校との相違をあげると、かなり不思議なことがあります。例えば、トイレのない学校はたくさんあります。多分五〇%以上の学校は、ありません。あつたとしても生徒が、トイレを使うことはできません。トイレには鍵が掛かっている使えないのです。授業は、午前と午後で生徒が入れ替わる二部制をとっていますから、我慢していれば間に合うのかもしれませんが、トイレを開放すると、付近の住民も使いに来るので、管理しきれないと聞いたこともあります。

ところで先生たちは、生徒たちに宿題を出す習慣がありません。学校で学習する時間が少ないので学力の定着は不十分ですが、学習を補う宿題の効果について気が付いている先生は少ないようです。学校の図書室には、まだまだ本が少なく、生徒たちが参考にできる本はほとんどありません。先生たちにも教科書と教師用の本（日本の指導書のようなもの）以外は、参考にできるものはほとんどありません。

理科の実験器具は、昔から少なかったように思われます。フランス時代（一九六〇年以前）には植民地統治のための学校はありましたが、庶民の教育は寺子屋が主体だったので実験などはやっていなかったようです。一九九〇年代後半になると、自由主義諸国からの支援が増え、さまざまな実験器具や備品が整備されてきました。また、ADB（アジア開発銀行）の支援で、五〇の学校に理科の実験器具セットが搬入されました。しかし、数年経っても、その器具セットはほとんど使われていないで、最初の梱包のまま置いてありました。

先生たちは二つの理由で使えなかったようです。一つは秤や顕微鏡などの実験器具をどのように使ってよいか

まったく分からなかったのです。二つ目は、壊した場合に弁償をしなければならなかったのです。日本のJICAが二〇〇〇年に始めた理科教育改善計画の初期には、多くの先生たちが、実験にはほとんど手を出しませんでした。実験器具の操作方法が分からなかったこともあったようでしたが、器具を壊すと自分の給料では弁償ができないと心配していたのです。

現在、支援を受けることができる学校には、少しずつ理科の実験器具も増えてきています。今では、物差しや三角定規、分度器などは市場に行くとき安く売っています。しかし、買ってまでして授業に使っている先生は、ほとんどいません。先生が教育を受けた時代には、触れることはまったくなかったからだと思います。ある講習会の時に、小学校教員養成校の校長先生が、皆の前に出て物理の光の反射実験で入射角と反射角を測ることにになりましたが、分度器をどこにあててよいか分からなかったで、大急ぎで手助けをしました。

教科書には使い方が載っていますが、実際に使ったことがないと、使えないものであるということを、カンボジアに来て初めて体験しました。